

第7回基礎学習理論研究会概要報告

奈良教育大学 中澤静男

◇開催日時 2020年1月16日(木)19時~22時

◇会場 奈良教育大学国際交流室

◇参加者 河野(附属小)、島(郡山西小)、新宮(平城小)、石田(左京小)、
中澤敦(近畿地方ESD活動支援センター)、中澤静(奈良教育大学)

◇テキスト 『新訳版・思考と言語』ヴィゴツキー著、柴田義松訳、新読書社、2001年

◇内容 第2章「ピアジェの心理学説における子どものことばと思考の問題」の講読

1. ピアジェによる言葉の発達に基づく子どもの思考の発達について

自閉的思想 → 混同性 → 論理的思想

夢の論理・純粋の自閉性 → 自己中心的思考 → 理知的思考

内言 → 外言へ

○子どもの心理学的本性によって規定された最初の思考形式は自閉的形式

赤ちゃんは空腹で泣く(周囲の状況におかまいなしに)

子どもの独り言は自己中心的思考の表れ 他者には理解できない 他者理解を想定していない

○子どもは自己中心的であり、利己主義的である。社会的な存在ではない

○現実的思考は、外から、まわりの社会的環境(例えば大人)からもたらされる長期の組織的強制によって押し付けられた後の所産

8歳までは、子どもの思考と知覚の全領域に自己中心性の影響がおよんでいる

8歳から12歳までの間は、自己中心性の影響は、思想のある領域・部分に限定される

○子どもの会話

自己中心的なことばと社会化されたことばの2つのグループに大別される

そして、6・7歳ごろまでの発言の大半は自己中心的である。

子どもの自己中心のことばは、白昼夢的思想の表現であり、必要ないものであり、何の機能もはたさないものであり、7・8歳ごろには消え去ってしまう。

2. ヴィゴツキーによる子どもの思考の発達について

赤ちゃんが空腹で泣くのは、保護者へ空腹であることを伝えるためである。

言葉は最初から社会的なものである。

赤ちゃんは言語を知らないだけで、泣くことで伝えようとしているのである。

子どもの独り言は、自分との対話である。障害物があると、独り言の量が増えるのは、自分と協議するからである。

少し発達すると、声に出さなくても(外言)頭の中で言葉を使って(内言)考えるようになる。

外言 → 内言

○社会的なことば → 自己中心のことば → 内言

○子どもの思考の発達過程の真の運動は、社会的なものから個人的なものへと進む。

3. ピアジェとヴィゴツキーの比較から

・ピアジェの二元論的思考

赤ちゃんは生物的存在であるが社会的存在ではない。赤ちゃんは自分の感情だけで泣いている。子

どもの会話は自閉的で他者を想定していない。8歳ごろに周囲（大人）からの強制によって、子どもの思考は、社会的になっていく。子どもの会話もそれまでの自己中心性が消え去って、他者を意識したものになっていく。内言 → 自己中心的言語 → 外言へと進む。

・ヴィゴツキーの全体論的思考

赤ちゃんのことも最初から社会的なものである。子どもは最初から社会的存在であり、社会的な言葉を使用しつつ、さらに社会性を身につけていく。

○ピアジェの子ども観には、社会的でないものと社会的なものがある。8歳ごろに社会的でないものが消え去り、社会的になっていくというように、二元論的であるが、ヴィゴツキーの子ども観では、子どももその言葉も社会的であると一貫している。行動・言語・思考が全体として、ひとりの社会的人間として発達していく（全体論的）。

○ピアジェの子ども観では、子どもらしさを大人が消し、社会人にしていく。これを学校教育にあてはめると、学習前の子どもは無駄なものを身につけているが、有用なものは一切もたない。教えるべき内容（学習内容）を細分化し順序良くならべることで、学習効果は高まる。：注入主義

○ヴィゴツキーの子ども観では、子どもも経験的に様々な知識や技能を身につけている。子ども同士のかかわりの中で、また教員とのかかわりの中で、良いものを他の児童に伝えたり伝えられたりしながら、学習していく。：構成主義

4. まとめ

現在、多くの学校で行われている授業研究は、教材の分割・並べ方、助同生徒への提示の仕方といったことに終始している。つまり、ピアジェ的な考え方がほとんどである。

子どもの「学び方」をよく研究し、一人ひとりの子どもの学び方に即した教育を行うことが、効果を高める。そのためには、「働き方改革」と叫ばれる昨今ではあるが、家庭訪問などを丁寧に繰り返し、家庭生活や生き立ちなど、子どもを丸ごと理解しようとする努力が必要である。